

令和6年1月

◆八木健選

～月城花風・第二句集『潮風』を読む～

前回の第一句集に続いて、第二句集の感想もオマージュで綴らせていただく。

◆逆風に強く花粉に弱い春

春遠し世間の風の冷たくて

杉花粉飛ばねば鼻歌らんらん

◆ピアニストのやうに田植ゑし白き指

泥田出てゆびを洗えばピアノ弾く

ピアニスト植田の季語で一句詠む

◆一色になれぬ無色や原爆忌

色といふ色を失ひ原爆忌

ピカドンの四文字忘れず原爆忌

ジェノサイド神は許さじ原爆忌

◆来客に電話餅まで膨らみて

長電話に焦れて焼き餅裏返す

餅焦げるほど来客の長電話

◆春の川たふんたふんと合流す

この先に広い海ある春の川

確信の無くてたふんと春の川

◆うつすらと風に色塗る冬桜

寄る風や冬の桜に染まりたい

近付けば頬もほんのり冬桜色

◆雲一つ寄りつかぬ空の底冷

冬空の底がポカンと抜けたかに

絵にならず雲ひとつない冬空は

◆冬ざれや休業いつしか閉店に

冬に入るコロナ禍に店閉ぢしまま

開店休業が休業閉店冷まじく

張り紙に休業とだけ空つ風

◆Google にサンタクロースの位置尋ね

I Tが苦手のサンタ苦勞する

ちょっと待てとサンタはGPSを見る

煙突で白髭煤けサンタさん

◆気まづさにからんと氷声を出す

水割の氷ひそひそ夜のカプル  
気まづさより味のまづさよ水割の

◆両翼に風足し北へ鳥帰る

Vの字の鳥の編隊北めざす  
俳人に一句詠ませて鳥雲へ

◆蒲公英の絮に越さるる三輪車

三輪車蒲公英の絮に案内され  
蒲公英の絮見失ふ三輪車

◆常用の薬二粒水温む

悴みて落とした薬粒さがす  
卵酒これも薬と寒灯下  
降圧剤白々ひかり春めきぬ

◆言ひ訳をつぎつぎ潰し石鹼玉

どれも短命シャボン玉宙に舞ひ  
多数決とは付和雷同のこと石鹼玉

◆どの靴も忙しさうな四月かな

朝の靴びかびかにされ新社員  
草臥れた靴もはりきる四月一日  
靴擦れの足を引きずり新社員

◆忘れゆくことも幸せ風揚がる

揚がりたる風の上から目線かな  
高上がる風に権力志向かな  
奴風仰向けになる不貞腐れ

◆転ぶより風船離れ泣きだす子

宙に浮く風船泣きつつ追ひかける  
無責任子を置き去りの風船は

◆核廃止空しくうたふ蟬時雨

蟬時雨非核三原則など知らず  
核の傘さして長梅雨非核国

◆西瓜切る真半分より少しずれ

難しい西瓜の切り分け五分  
西瓜切る可愛い子には大き目に

◆咲き初めの着丈短き菊人形

菊人形の足下を濡らし水を遣る  
水遣りにスカート濡らす菊人形

悪口を聞かぬふりして菊人形

◆秋祭両手に残るソースの香

焼き鳥賊の臭ひが誘惑秋祭

啖呵売かこみざわめく秋祭

◆褒め言葉ちびちび浮かせ今年酒

今年酒まずは香りを云々し

今年酒愚痴もちびちびこぼされて

◆千歳飴離さず登る滑り台

千歳飴引きずって持ち三歳児

背丈より長き袋の千歳飴

◆振出しに戻る話や初電話

初電話いつの間にやら長電話

初スマホなどとは云はず初電話

諍ひで終はる展開初電話

◆月城花風（つきしろかふう）

本名、美紀。昭和三十九年、東京都生まれ。平成二十九年、滑稽俳句協会入会。「圓」

「玉藻」同人。